

平成29年度 第6回（震災後82回）

陸前高田市保健医療福祉未来図会議 議事録

テーマ：「医療現場から見た陸前高田の健康課題」

日時：平成29年11月9日(木) 18:30～20:30

場所：陸前高田市役所4号棟第6会議室

参加：24名12団体

資料：下記にアップ

<http://healthpromotion.a.la9.jp/saigai/rikuzentakata.html>

1 挨拶（陸前高田市民生部長兼保健課長 菅野利尚）

市では健康づくり推進計画を作成している。大きなテーマの1つとして、住民と創る医療を掲げている。陸前高田市は医療資源が少なく、医療現場の過重労働という問題もある。かかる状況で住民一人一人がどう医療と向き合うか、医療機関とどう協力していくかという事が重要になる。

本日はみなさんが考える健康づくり、医療と住民の関わり方について忌憚のない意見交流をお願いしたい。

2 内容

(1) 未来図会議が目指してきたこと

陸前高田市被災地絆づくりアドバイザー 岩室紳也

(2) 医療現場からの声

Home Nursing in 気仙 佐藤 涼子

(3) 参加者のみなさまと「はまってけらいん、かだってけらいん」

各参加者のご意見

(4) その他連絡・アナウンス

(陸前高田市被災地絆づくりアドバイザー 佐々木 亮平)

1年前の未来図会議で「エンド・オブ・ライフケアと地域コミュニティ」というテーマを取り上げた。行政としても取り組んでいく事はあるし、ご家庭や地域の中でも生きる事死ぬこと最期をむかえる事について考えていきましょうという事を健康づくり推進計画の中では目指している。ぜひ皆さんもそのことを改めて意識してはまかだしまししょうというのを1年前に議論した。グ

ループワークでは、こんな声が出た。その時は、緩和ケアが1つのキーワードだったが、誰でも出来る事があるとわかった、訪問看護ステーションが足りない、QOLの改善だけでなくお話を聞くという事もこの緩和ケアの中に入っているとわかった、顔と腕と腹が見える関係とし認め合うことが大事、いろんな職種でかかわっていく、高田の特徴は、環境は家が大きい、家族や親せき近く協力できる方がいる地域という声があった。病気があっても暮らせるような地域にしていきたい、人に話をきてもらい、話すことがケアになっていると気が付いた、セカンドオピニオン、地元の先生に診てもらえるようにできたらいい、その人らしい最後とは何か、職種で連携することの大事さ、最後だけでなく予防という視点も大事、声をかけたりしながら、がんに限らず考えていけるといいという意見もあった。

(1) 未来図会議が目指してきたこと

(陸前高田市被災地絆づくりアドバイザー 岩室紳也)

未来図会議では、住民一人一人がどのように地域でくらしたいのか、どのように支え合うのかという事を考え続けることを目指してきた。

重要なのは地域のつながりの強化、健康日本21で国も重視しているところである。つながりには「きずな」と「ほだし」がある。信頼、ネットワーク、お互い様の3つがそろったとき、人は健康的な行動をし、様々な方面にいい影響がある。

陸前高田市が、健康づくり推進計画の中に、住民と創る医療を入れたというのは非常に画期的である。医療から見た健康問題というの、色んな切り口から考える必要がある。

住民が正直に話せる環境が陸前高田に何か所あるか。何人悩みを聞いてくれる人がいるか。当事者、援助者がつながることは大事だが、どれだけの数のつながりを持っているかが非常に重要。

この会議は本音で話し合う、生の声をぶつけ合う、何ができるかを考え続ける場としていきたい。

(2) 医療現場からの声

(Home Nursing in 気仙 佐藤 涼子)

訪問看護とは看護師が自宅に訪問して、子どもから大人まで、主治医が必要と判断した人それぞれに応じた看護を行う事で、医師の指示があれば病院と同じような一定の処置も可能。

課題として、訪問看護が知られていないこと、訪問看護の質の向上、高齢者だけでなく精神疾患や医療的ケア児に対応するために医療・保健・福祉・

教育・看護の連携を深める事が求められている。

(3) 参加者のみなさまと「はまってけらいん、かだってけらいん」

- ・地域の住民がどうやって医療に関わればいいのか
- ・医師が少ないなかで、医療にかかわっている薬剤師や看護師が、医療へのアクセスの前段階にできることはないか
- ・住民が歩いていける距離に最初に質問できる場所がないと、その次の段階に行かない
- ・薬局は何でも相談できる場で、血糖測定もできる
- ・薬局がまちの保健室のような役割
- ・院外処方になり、薬局に行く機会は増えたが、処方箋を持っていないと入りにくい部分もある
- ・かかりつけの薬局があれば住民も行きやすいのではないか
- ・薬局に個別スペースがあればプライバシーを保護しながら話せるのではないか
- ・昨年8月からは、県立高田病院からも訪問看護が出ているが、普段の病院の業務と並行して行うので一定の限界がある。退院後不安がある患者さんに対して1か月程度訪問している。地元の訪問看護ステーションと連携しながらやっている。
- ・住民と創る医療という事からすると、住民がいろんな制度を勉強し、活用していく事が必要となる
- ・精神科の患者への訪問看護では状態観察と投薬。精神疾患の人は外に出なかつたりするので、話を聞くことも大事。
- ・地域の住民がその患者を受け入れて話を聞くような雰囲気になれば、訪問看護は要らず、医療費がかからず、住民それぞれが生きやすい場所になる。患者に対して、プロではない住民が提供できる関係性もある。
- ・訪問看護ステーションを立ち上げた経緯
 - ⇒平成4年に制度化され、Home Nursing in 気仙は平成5年に立ち上げたが、まだ知られていない部分がある。リハビリ等の訓練をしているうちに寝たきりの人が杖をついて歩けるようになったなどの成功体験があると患者の励みになるし、それを見た住民からの需要も大きくなる。
- ・訪問看護を知ってもらうにはどうしたらいいか
 - ⇒薬剤師や看護師は身近な専門家のイメージ。医師と違い、薬剤師や看護師に相談してもすぐに効果があるわけではないというイメージを持たれている。
 - ⇒専門家だからできるとかではなく、専門家ではないけれど一緒に考え

てくれる身近な人になるというのも大事

⇒気仙はコミュニティがしっかりしているので、良い専門家がいればロコミで伝わる。

- ・訪問看護師はその人の生活を見る看護師
- ・医師を呼んでもすぐに来れる地域では無いので、今ある資源を活用して出来る範囲で何でもやるのが大事、看護師、薬剤師等の専門職の連携が大事
- ・人と人がつながっているところではじめてロコミが成立する。広めるためには広報にのせるのではなく、ロコミ、はまかだが大事
- ・精神科は敷居が高いというので、心のケアセンターを紹介しようとする
と「地域の人と会いたくない。」というので、遠くの病院を紹介している。
- ・薬剤師は薬を出した患者に対しては別報酬としての訪問ではなく、行って出したものが飲めているかを確認する必要がある。薬剤師が週1回顔を合わせて話をしただけで飲めるようになる。
- ・薬局が地域の総合窓口といった役割を果たすためには、門前薬局ではなく、病院から少し離れたところにあっても良い。
- ・薬剤師、訪問看護師、地域住民が関わる環境を整備をすることで癒される住民が増える
- ・住民で支える医療に取り組むとあるが、今も十分支えることが出来ている。しかし、意識を共有して取り組むことで、さらに医療環境が良くなる。

(4) その他連絡・アナウンス

- ・11/15～29 こころの健康づくり計画パブリックコメント募集
- ・11/11 いい歯のつどい
- ・11/23 たかた☆こどもフェス
- ・11/26 くちビルディング選手権
- ・12/3 A I D S文化フォーラム in 陸前高田

◆次回（第83回）：平成29年12月15日（金）13：30～15：30
メインテーマ

「健やかな地域で育つ、健やかな子ども ～子育ては、つながりづくり～」

会場：陸前高田市役所 4号棟3階第6会議室